

## 特集「祭礼と芸能」に寄せて

企画・編集委員 茂木 栄

『明治聖徳記念学会紀要』復刊第五十二号を年内にお届けすることができることは本学会会員、執筆者・編集を担って下さっている本学会事務局、事務局を置いて下さっている明治神宮のご協力・ご支援の賜物と感謝申し上げまする次第である。

本学会紀要では、これまで「神事芸能」を特集として取り上げたことはなかった。本学会は、ご承知のように加藤玄智博士の尽力によって、大正元年に創設されたことは前号の企画・編集を担当された阪本是丸も「あとかぎ」に記されていた。その加藤玄智博士は、大正十三年に「諏訪神社の御頭祭と其大祝に就いて」（『宗教研究』新第二巻・第四號、七月一日刊）という論考を発表している。本学会紀要に「祭」「芸能」の特集をという声上がるのは当然の成り行きであった。かくして復刊第五十二号は「祭礼と芸能」という特集を組むこととなった。

神事芸能、祭礼文化、歌舞伎、獅子舞、民俗芸術、地芝居、雅楽、祭式、江戸、伊勢、京都、そして郷土芸能研究に大きな業績を残しながらほとんど研究されてこなかった小寺融吉を取り上げた論考も掲載することができた。また、祭・芸能に関し、里神楽に関し、民俗芸能研究の泰斗であった故本田安次先生に関し、著作集を刊行された錦正社会長の随想など、興味深く読み易い事柄が論じられている。さらに、論考の網からこぼれ落ちたテーマに関しては、シンポジウムが受け皿となっている。基調講演の山路興造氏、コメンテーターの小島美子氏、同じく高山茂氏、コメンテーターの福原敏男氏、岸川雅範氏など祭・芸能研究では高名な先生方にお集まりいただいて、論じることができた。

前号に引き続き本号も五百五十頁近くの大部なものとなった。それでも、もし不足部分があるところのご指摘を受けるとすれば、ひとえに企画を担当した筆者の責任である。

何はともあれ、原稿を寄せてくださった執筆諸氏ならびに関係各位のご厚情と努力に厚く感謝・御礼申し上げまする。

（國學院大學神道文化学部教授）